

＜編集部にて＞の記

- W:** 何を讀んでるの、マイアー君？
- M:** 本です。次の書籍見本市に向けて準備をしてるんですけど。
- W:** あら、それは好都合だわ。ライプツィヒに行行ってほしいと思ってたから。ドイツで開かれる大規模な書籍見本市のひとつは、ライプツィヒで開かれるのよ。でも、開催は春だったかしら…。
- M:** 次の開催時期だったら、インターネットですぐに調べられますよ。
- W:** そうね、じゃあ調べてちょうだい。とにかく「www.leipzig.de」っていう URL で調べれば、ライプツィヒのサイトのサイトがみつかるわ。ドイツのほかのすべての町と同様、「町の名前.de」っていう URL でね。
- W:** で、ライプツィヒは気に入った？
- M:** ええ、とにかく興味深い町でした。書籍見本市には残念ながら訪れることができませんでした。あれは、たいいてい3月に開かれるんです。
- W:** ライプツィヒについて、報告すべき興味深いことは他にあるかしら？
- M:** アウアーバーハス・ケラーへ行行ってきましたよ。あの有名な酒場に。
- W:** あら、じゃあ、あそこでゲーテの『ファウスト』を讀んだの？ 作品の中にあの酒場のことが出てくるわよね？
- M:** いや、そうじゃなくて、すばらしい赤ワインを飲んだんです。1989年物の。
- W:** マイアー君、読者はライプツィヒについて知りたいたいのよ。あなたの好みのワインについてじゃなくて。
- M:** ええ、でもそれは本当に特別なワインなんです。なぜって1989年は、旧東ドイツ(ドイツ民主共和国)がついに崩壊した年ですから。
- W:** なるほど。あの有名なライプツィヒの月曜デモのことを思い浮かべているのね。
- M:** そのとおりです。1989年当時ライプツィヒは、旧東ドイツ政権に対する抵抗の拠点のひとつでした。毎週行われた抗議のデモは、旧東ドイツ崩壊に大きく貢献したんですが、そのデモ参加者が示した勇気を記念して、あそこではその濃厚なワインが出されるんです。
- W:** あのデモがテレビに映し出されていたときのことを、私まだよく覚えてるわ。最後に、抵抗した人たちが有名になったあのスローガンを叫んだの。「Wir sind das Volk. われわれこそが国民だ」って。
- M:** 当時、デモは許可されていませんでした。だから彼らには大きな不安もありまし

た。でもお互いに勇気を出し合って、最後にはほとんど多くの人々が集まり、とうとうその数は1万にもなったんです。

W: いったいどこでそんなに詳しい情報を仕入れたの？

M: ほくはそのワインをひとり飲んだわけじゃありません。当時あのデモに参加したある市民権活動家と語り合いながら飲んだんです。

W: ジャーナリストの鑑となるような仕事ね、マイアー君！

＜雑誌記事＞の記

ライプツィヒ

毎年、書籍やハイテクの大規模な見本市が、多くの人々をライプツィヒに惹きつけています。800年におよぶ見本市の伝統ゆえに、この町が「見本市の町」と呼ばれるのももともなことです。すでに1765年に、56の出版社(!)が連合することで、最初の書籍商組合が成立しているのです。

一方ゲーテは、多くの年月をライプツィヒで過ごし、そこで数々の重要な作品を書いたのですが、この町のことを自らの作品『ファウスト』の中で「小パリ」と呼びました。『ファウスト』の中で描かれた酒場「アウアーバーハス・ケラー」には、今日でも訪れることができます。

ライプツィヒという町と結びつけられるのは、とりわけヨハン・ゼバスティアン・バッハという名前です。有名なポップス・グループ「ディー・プリンツェン」の歌手たちが生まれたトーマス教会少年合唱団「トマーナー・コーア」や、250年も前に結成されたゲヴァントハウス管弦楽団は、世界的に有名です。その他にもライプツィヒでは、ジャズ・フェスティヴァルから国際手回しオルガン・フェスティヴァルにいたるまで、さまざまな音楽イベントが開催されています。

ライプツィヒ(人口50万)は、旧東ドイツ(ドイツ民主共和国)政権に対し非暴力の抵抗を行った中心地のひとつでした。毎週月曜日に、大規模なデモが行われ、それについては「Wir sind das Volk. われわれこそが国民だ」というスローガンの中でクライマックスを迎え、1989年秋の旧東ドイツ崩壊に、決定的な役割を果たしたので

(トーマス・マイアー)